《論評》

中国の秘密結社研究から中国の国家社会の特質を論ず
——孫江著『近代中国の革命と秘密結社』（汲古書院，2007年）の書評を兼ねて——

（神奈川大学名誉教授）小林　一美

1．はじめに

中国人の中には，大陸・台湾や海外の華僑・華人を問わず，昔から青幇・紅幇・洪帮などの帮会や，会・道・門・教・堂……等々といわれる宗教結社が多く存在していた。さらにまた拳棒結社・気功宗教結社なども多かった。古来中国ほど多くの秘密結社が生まれ，さまざまな革命や政変，あるいは反社会的事件に関係したり，民衆蜂起の主役になったりしてきた歴史を持つ国は世界で稀である。こうした現象に対して，日本人やその他の外国人はもとより，当の中国人さえ「いったいどうしてなの」と，不思議に感じてきた。現在中国を支配している中国共産党も，なにか秘密結社のニオイがするといっても否定する人はいないであろう。清朝末期には，革命派に最も頼りにされてきた秘密結社，辛亥革命以後には民国政府に弾圧された秘密結社，しかし時には中共勢力にはかなり頼りにされた秘密結社，そして中華人民共和国建国以後には，徹底的に弾圧されながら近年急速に復活し，法輪功のように中共政権を脅かすほどに成長した宗教的な秘密結社もある。いったいこれは何だ，どう考えたらよいのだ，と多くの人が考え込んでしまったのもまたむべなるかなである。こうした状況の中で，孫江先生の理論的，包括的且つ論争的な本書が出版されたことは大変喜ばしい。氏には，日本や欧米の研究書や論文を自由に読み分析することができる語学力と教養，それに理論的な力があり，これまで発表してきた論文をまとめ，理論的・実証的に練り上げて，本書のような重量感ある専門書を上梓されたことは大きな意義があり，中国ではもちろんのこと，日本や各国における中国近代史研究に大きな刺激を与えるものと堅く信じる。

本書の構成を以下に紹介する。

序章　「脱構築の革命史叙述——秘密結社との関係を手がかりとして」

第Ⅰ部

第１章　「秘密結社という差異装置」

第２章　「律例言説の射程——清朝の支配における秘密結社」

第Ⅱ部

第３章　「排満言説，秘密結社と革命の創出」

第４章　「統合と動員——民国初期における政治と秘密結社」

第Ⅲ部

第５章　「共産主義者・労働者・青紅幇——上海における労働運動の展開と挫折」

第６章　「共産党・農村社会・秘密結社——農民運動・ソビエト運動における紅槍会・土匪」

第７章　「井岡山の「星星之火」——革命，土匪と地域社会」

第８章　「陝北高原の「赤い星」——革命，哥老会と地域社会」

第９章　「華北——八路軍，紅槍会と地域社会」

第10章　「華中——新四軍，大刀会・青紅幇と地域社会」

第Ⅳ部

第11章　「建国初期における国家統合と秘密結社」

第12章　「地域統合における秘密結社——西安市のケース・スタディ」

第13章　「地域統合における秘密結社——湖南省のケース・スタディ」

第14章 「「反動会道門」としての一貫道」
終章
以上

2. 著者の意図

本書全体を貫く問題意識と方法論は，序章と第1章，終章に要約されている。それによると，この書を貫く主題は，当然にも書名に記されているように，第1に「革命，秘密結社」という2つの概念と実体に関する考察である。この2つの問題から「中国革命史に関する社会史的研究を行う」のが，著者のこの書の目的である。つまり「社会史の角度から様々なテキストにおいて革命と秘密結社がどのような革命ないし反革命の内容を付与されてきたかを明らかにすることである」(16, 17頁)。第2に，方法論として中共と秘密結社の関係を地域社会という「場」に密着した関係性の中で考察することである。つまりわかりやすく言うと，「全体的な歴史」，「構造化された歴史」ではなく，具体的な人間の場＝地域社会の特性の中に生きている具体的な歴史として掘り出し光を当てることである。第3に，史料に基づく歴史叙述の問題である。「歴史は叙述のなかにのみ存在する。過去の『不在』と過去の『実在性』はつねに緊張関係にある」のであり，言説としての革命と実体としての革命を区別しながら，両者のギャップを埋めることを試みることである。

本書の理論的な問題提起の中には「社会史，歴史叙述，革命言説，大文字の革命，小文字の革命史，革命に抗して書く，脱構築」等々の言説が多く，これらは正確に理解することはできなかったが，著者は，これまでの中国と海外で行われてきた「革命／反革命」「反乱／革命」「正統／異端」「全体／部分」というような二項対立の構図から自由な立場を構築しようと模索しているのであろう。「革命」という「言説」は，古来勝利したものが自己を絶対正義として標榜し，敵対したものを全面否定する二項対立の図式に立つ構造の上に成り立つものであり，著者は中国の過剰すぎた「革命」という政治言説から，「秘密結社」の実態と研究を引き離し，新しい視点・境地・実態を指し示さんとしたのであろう。

3. 各章の概要

ではこうした問題意識からする秘密結社の研究は，各章でいかなる問題を取り上げ，いかなる考察，いかなる研究を行ったのか，具体的に見てみよう。

第1章では，清朝時代から中華人民共和国に至るまでの，政治権力と秘密結社の関係を考察して，その時代ごとに，また政治権力の交代ごとに秘密結社の政治における位置・意味がさまざまな「差異」を付与されてきたことを論じて，政治権力・国家権力から規定される「大文字の」秘密結社の姿態とは異なった，地域社会での「小文字の」秘密結社の姿態を見出そうと，本書の問題意識を展開している。

第2章は，清朝時代の国家と「異姓結拝」の天地会，三合会や民間宗教結社の関係を，清朝の「律例」の規定の変更の中に探ったものである。そこでは「異端・邪教，剿と撫，文と武」などの政治的言説の内容の検討を通じて，揺らぐ国家と秘密結社の位置と関係性を測定しようとした。

第3章では，清末の排満革命における秘密結社の位置を，革命派の利用や取り込みという観点から見るのではなく，具体的な政治的社会的状況の中で，秘密結社を取り巻く社会的ネットワークを通じて，その姿を明らかにしようとした。秘密結社を頂点とする中国人の「血盟」の関係の結び方，つまり「鶏の血をともに啜って骨肉の関係を結ぶ」会党的文化が，辛亥革命の際に主役を演じた革命諸党派を拡充・拡大させてゆく，そうした秘密結社が革命に深く関わってゆく能動性を探してその大きな役割を主張した。また，秘密結社が

革命に深くかかわったのは湖南省，陝西省，貴州省，四川省の4省であるが，こうした所では革命諸党派の「革命言説」が，伝統的な会党や教匪の言説から大きな威力を受け継いでいたことを論じている。

第4章では，辛亥革命成功の後に，政治舞台で哥老会，三合会やその他の秘密結社がいかなる運命を辿ったのかを検討している。民国時代の政治諸党派は，その多くが会党など秘密結社を動員した後に彼らを統合しあるいは排斥した。既に「排満革命」の時代は終わったと考えたからである。秘密結社は，伝統的中国社会の「反秩序」を代表する勢力であり，民国時代の近代的社会を遅滞させ，混乱させる重大な要因と考えられたのであった。袁世凱，黎元洪，孫文，毛沢東等々の各段階での秘密結社との関係や「言説」が紹介されている。

第5章では，1920年代の上海を中心とした共産党や労働運動と青幇・紅幇の関係を論述している。中共は，労働者のなかに隠然たる勢力をもっていた秘密結社に入り，「拝老頭子」，「做小兄弟」関係を通じて，労働者を主体とする政党への舵を切ることができた。そしてこの労働運動を通じて中共が秘密結社勢力を排除し始めたが，このことがまた，上海の青・紅幇を蔣介石の側に追いやり，蔣介石の「4・12クーデター」を成功させたとする。

第6章では，中共が紅槍会や土匪に対していかなる評価を行い，また時としてどのように認識を変え，対策を変えてきたかを問題にしている。中共が各地方で革命工作をやり，根拠地を創る上で，土匪・紅槍会・会党を巻き込み，又はそれを利用する以外に成功の道はなかった。しかし，コミンテルンの方針と共産革命の理論から逸脱することはできない。そこで，1920年代の党の方針は絶えず変更を余儀なくされた。紅槍会・大刀会・一心会などの民間武装結社も，中共組織に飲み込まれまいと時として地主側について反撃し，敵対した。こうした複雑な関係史がここでは紹介されている。

第7章では，中共史上最初の井岡山根拠地における毛沢東・彭徳懐など紅軍と土着の土匪であった袁文才，王佐の関係を追って，革命と土匪と地域社会の特質の関係性を分析したものである。中共の土匪政策の転換，袁・王など客家勢力と土着民出身の革命家との対立の激化，それに紅軍内部の種々の軋轢など3つの要素が複雑に絡み合って，袁・王暗殺事件が起こったとする。地域社会の特質から大文字の革命史論では隠されてしまっている「井岡山革命根拠地論」を地域社会論から再構成しようとした章である（評者は，袁・王の暗殺事件には，まだ毛沢東と彭徳懐の間に何か隠された秘密があったのではないかと疑っている。私の一連の「革命根拠地」関係の研究論文を見られたい）。

第8章では，毛沢東などが率いてきた紅軍主力が，新しい根拠地にした「延安」における劉志丹・謝子長など在地革命家の歴史を訪ねて，劉・謝らは在地の土匪・流民・哥老会匪などが伝統的に地域で形成してきた在地文化を通じて革命勢力となったのだとする。また，共産党は劉が死んだ後にも，この在地の哥老会に代表される民衆勢力・民衆文化・ネットワークを通じて，延安に巨大な勢力を扶植することができたと主張している。

第9章では，華北における紅槍会の勢力をめぐって，日本軍と傀儡政権と八路軍の3つの勢力がいかなる対応をしたかを主題にしている。この3者にとって，紅槍会はある時は封建的な落伍勢力，ある時は利用しがいのある対象，ある時には共に手を携え得る友軍という複雑な勢力であり組織であった。だから，状況によって紅槍会は敵にも，味方にもなったのである。どちらにせよ紅槍会は無視し得ぬ大きな農村勢力であり，これまで

の研究のようにこれを「排他性」という性格だけで考えてはならないとする。

第10章では，華中で活動した共産党・新四軍が，その活動地であった江蘇省の農村地帯の有力な勢力であった大刀会・小刀会・青紅幇・土匪などを如何に評価し，また如何に関係したかを論じている。新四軍は，敵である日本軍・傀儡軍・国民党軍という３つの敵から身を守り，勢力を維持するためには，在地の上記勢力と深い関係を持たねばならなかった。そのために自ら彼らのなかに入り「幇会になる」ことも辞さなかった。また新四軍の将兵が生きるためには，状況によっては農民を支配し，彼らから税をとり，あるいは人員を補充する必要もあった。かくして，農民や大刀会などから反撃を食らう場合もあり，淮北地域の共産党は青紅幇出身の党員を批判，粛清することもあった。このように，共産党・新四軍は在地勢力と如何に関係するかが重大な課題であり，状況はきわめて複雑だったとする。

第11章では，共産党の建国初期における「剿匪運動」と「反革命鎮圧運動」に焦点を当てて，宗教結社（会道門）弾圧と幇会（青・紅幇）結社弾圧の実態を解明しようとした。中国革命はきわめて暴力的な形態をもって遂行され，長い革命闘争の中で共産党・紅軍と深い関係を持ってきた民間諸結社を，中共は建国後すべて反動勢力として一掃し，敵対する者総てを打倒したので，膨大な数の犠牲者（さまざまな数字があげられている）が生まれた。そのため伝統的中国社会にあった「親類・師縁・地縁関係が打破されて」しまったこと，革命的暴力自体が１つの目的になるという状況が生まれたこと，等々を主張した。

第12章では，建国初期の西安市における青幇・洪幇・理教の実態を紹介し，人数・主要メンバーの出身地・活動実態・ネットワークなどを分析した。西安市における青幇の総人数は約9000人，洪幇の人数は約３万900人，理教約1000人，全体で約４万1000人ほどであったという。これらに対する中共の取り締まりの実態，状況を紹介している。この場合，中共の会道門的結社に対する取り締まりと，青幇など幇会結社に対する取り締まりにはかなりの違いがあったとする。

第13章では，建国初期の湖南省における幇会組織に対する中共の「反動党団」としての取り締まりとその一掃の状況と実体を紹介し，分析している。1949年に時点で，湖南省には各種土匪・反中共の武装勢力が約20万あったが，以後１，２年ほどで彼らは一掃され，地主や国民党関係者クラスは「反革命分子」として弾圧の対象になったとする。

第14章では，建国時に全中国で最大の会道門であった一貫道を取り上げて，その急激な成長の原因を張天然の教義と組織の改革に求め，また一貫道と日本軍・国民党との関係の在り方を分析し，そして中共の弾圧過程を明らかにしている。国民党も共産党も一貫道を「漢奸組織」として弾圧の対象にしたが，一貫道はこの両政党・軍の中にも大きく食い込んでいた。そのため建国初期の中共は，党内外の中核分子に徹底的な攻撃を加え，「反動会道門鎮圧運動」を建国時の最も重要な位置に置いたとする。しかし，一貫道的組織は未だ死に絶えたのではなく，復活の兆しさえ見られるという（評者は，一貫道が1930年代から40年代にかけて，急速に全国に広まった原因は，軍閥混戦，日本の侵略戦争，国共内戦と続く終末論的な時代に，一貫道がもっとも民衆の救済願望に応える「象徴性」＝「流行性」を持っていたからだと考える。一貫道は民衆の観念が生み出した「希望の幻想体」となった，といって一貫道が民衆のために尽くす，優しく，正確な，立派な組織だと言っているのではない。嘉慶白蓮教の反乱も，太平天国の反乱も，義和団運動も，農民や全人民の要求を科学的に正確に，断固として代表したから拡大し燃え広がったのではない。「星火燎原」とい

われるように，小さな火でも広大な世界に燃え上がる「白蓮教のような，義和団のような，太平天国のような民衆情緒」と「中国民衆の精神的な，文化的な伝統社会」の存在を考慮に入れなければならない)。

終章では，中国における「革命／反革命」，「動員／弾圧」という二律背反の政治言説とその実態の乖離・差異（そこから生まれる「緊張」をも含めて）をめぐる理論的な考察が行われている。そこでは「秘密結社の革命性と反革命性」という二項対立の政治言説も，実態とは大きく乖離していたとする。

4. 著者の意図と功績

以上が，全14章の極めて簡単な紹介である。次に著者が本研究書の中で展開せんとした「地域社会，社会史的関心，場への関心，小文字の革命史へ，革命に抗して叙述する，秘密結社に抗して書く，革命史からの脱構築，歴史と歴史叙述の緊張，テキストについての考察」等々の，理論的・方法論的提言が如何なる新しい秘密結社史論の地平を生み出したのか，またそこには如何なる問題が待ち構えているのか，こうした角度から本書を評してみたい。著者が本書を書き世に問う最大の関心は，党のみを唯一絶対の歴史の審判者にする「勝てば官軍」史観を解体し，また従来の研究史を批判的に整理し，問題点や課題を明示し，さらに新しい史論，史観に立って「近代中国の革命と秘密結社」の歴史を再構築することにある。著者は，状況と実体を上からのみ見るのではなく，縦からのみ見るのでもなく，下から・横から・斜めからも見直そうとする。一方でまた，実態を見る目線があたかも地面を這うように細かく「地域・場・情況・社会」に置かれる。秘密結社を中心にして日本軍・傀儡軍・共産軍と，それに民衆・土匪が絡まって，地域・社会・状況の変化に応じて，それら全体の諸関係が変転する。かくして秘密結社や土匪にコビリツイテいた「反動会道門」「反動的秘密結社」「反革命分子」「悪質分子」といった「党無謬神話」を示す政治言説は，本書の研究によって，有効性と威力を失った。「秘密結社」を取り巻いていた，これまでの枠組み，諸概念，常識等々が威力を失うに至ったのである。

中国近代社会は，再び「限りなき豊穣の渾沌」に戻り，伝統的な「秘密結社的社会」の重量あるシタタカな姿が中国近代史研究の地平線に浮かんでくるのである。かくして改めて，明清時代から発生・展開・発展して，中国近代社会に牢固として巨大な姿を現し，しかも毛沢東時代に息の根を止められたかに見えて，実は「国家に抗して」「革命に抗して」，今もなお存続し，また新たに復活せんとしている「秘密結社的なるもの」「秘密社会的なるもの」とは何か，その巨大な姿態と他を圧倒する重量とは何なのか，それはいったい何処から来るのかと，評者はこの書を読んで改めて考えざるを得なくなったのだ。著者が「万華鏡」のように開いて見せてくれた「秘密結社なるもの」の多様なる様相と細部，そして「秘密結社に抗して叙述する」，「革命に抗して叙述する」という分析視角＝方法論は，秘密結社と革命を，新しい土俵の世界に導くのである。「秘密結社」は，革命と反革命を超越して，党の階級区分を超えて，さらに拡大し，膨張し，遂に中国国家社会史全体の重大な課題となって，改めて私達に迫ってきたのである。

5. 秘密結社的なるものとは何か

著者は，本書の中で「何が秘密結社であるか，何が秘密結社でないのか。なぜ中国社会や海外の中国人社会にこんなにも多くの秘密結社が存在するのか」(63頁）と問うているが，この問いこそが本書が導いた新しい課題なのである。そこで「何が秘密結社なのか」について，私の考えを述べたい。中国の秘密結社なるものは，欧米や日本

で一般に言われている「秘密結社」なるものと大きな違いがあるように思う。中国の秘密結社なるものは，各階層・各地域に幅広く存在し，姿は多種多様であり，その秘密性にもさまざまな濃淡がある。あの民国時代に全国に蔓延した一貫道などの「会門道」は，各種権力とも結び，全国いたるところに公然と拡大，拡充，蔓延して，秘密性などあるのかないのかも分からない有様であった。哥老会・青紅幇・洪門などといわれるものも，政府高官，高級軍官，政治家，財閥などと深い関係を持っており，国家権力から弾圧される時だけ秘密的存在になるといってもそう誤りではない。反社会的にもなれば善良にでもなる，いや反社会的であり同時に反権力的であり，善良であり同時に悪質でもあるといった，融通無礙の存在といってもよかろう。中国の会道門や幇会を「秘密結社」と呼ぶ時，私には大きな違和感が付きまとうのである。それは社会の性格の特徴を示すものではないのかとも思う。またその量と質を見ても半端な存在ではなかったのである。さらに敢えて誤解を恐れずに言えば中共自体が，高度に発展したマルクス・レーニン主義の暴力革命論で武装し，遂には国家権力を掌握した科学的秘密結社の一種である，あるいは社会科学で武装した現代の会道門の一種であるといっても，全く誤りとも言えないのではないか。そんな気さえしてくるのである。

本書を通読して思うことは，民衆は会道門に，幇会に，その他さまざまな集団（土匪をも含めて）に，相互扶助的組織，社会的紐帯の絆，共通の文化共同体，伝統的信仰共同体等々の役割を期待し，またそうした願望をもって参加していったのだと思った次第。しかし，そうした組織・集団・結社とその指導者は，大衆のこうした素朴な期待に応える思想も手段も才覚も持っていなかった。というよりそうした民衆の願望を実現してやる「社会的な条件・環境」がなかったのだ。だから，さまざまな秘密結社を作って，日本軍・傀儡軍・軍閥・国民政府，そしてある場合は共産党に八路軍に新四軍等々に種々様々な関係を持ちかけ，それらに利用したり利用されたり敵対したり合体したり裏切ったり，また改めて擦り寄ったりしたのであろう。以上が，私のこの重厚な著書を読んだ後の感想である。

6. 中国の国家と社会の関係性について

評者は以前，「中華帝国と秘密社会」（神奈川大学人文学研究所編『秘密社会と国家』勁草書房，1995年所収）なる論考を発表して，中華専制帝国における「国家／社会対立」という二項対立の構図の中に，中国における「秘密社会・秘密結社」なるものの「秘密性」が隠されているのだとし，「専制的世界帝国の下，中国民衆は秘密結社を通じて『社会』を創出し，『政治』に迫る」と主張したことがあった。それに対して，著者は小林は，「歴史的実在としての秘密結社から一歩離れて，新たに理念としての秘密結社を作り出したのである」（52頁）と批判している。しかし，私は孫江氏のこの著書を読んで，氏の批判にもかかわらず，私の主張がますます説得力を増しつつあると感じたのであった。以下，持論を展開することにしよう。

中国は専制主義の長い歴史をもっていたが，明清時代にそれは頂点に達した。この専制主義とはいったいいかなるものであったか。本書の第２章には「清朝がどのように秘密結社を支配し，弾圧し，懐柔しようとしたかが書いてある」ので，著者が挙げる清律の事例などを示し，その専制ぶりを紹介しておこう。「異姓結拝したり，異姓結拝し血を歃って盟約を結んだりしたものは処刑や処罰を与えられる」，「異姓結拝の人数が20人を超えた場合は，その主犯者は直ちに絞首刑にされた」，「知識人を中心とした結社は何らかの政治的行動につながりかねないと見なされた」，「清朝は，宗教，とりわけ宗教結社を既存の政治秩序，社会秩

序に組み入れることに腐心した」,「仏教・道教は異端的な存在とされた」,「民間宗教結社を作った張角や徐鴻儒の類は邪教とみなされた」,「地方組織である保甲の責任者やメンバーが保甲内部の邪教を検挙，禁止する責任を負わされた」,「本来政府が担うべき治安維持の仕事を地域社会に押し付けた」,「皇帝個人の意思による上諭が，しばしば律例をも凌ぐ影響力を持った」,「剿と撫が状況にとって使い分けられた」(評者注，逆賊でも，撫して帰順させ朝廷の官位を与えたり，官軍に編入したりしたことは，中国では伝統的に行われ珍しくはなかった。共に相手を「匪賊」と呼びながら，合作したり和解したりするのは権力の常套手段でもあった。「賊・民・官」にはある種の親和関係があり，また相互の循環構造も存在していた。黄志繁『"賊""民"之間』(三聯書店）を見よ)。「1727年の山西省のある白蓮教事件では，不軌の心を持っているだけで14人の教徒が処刑された」等々。以上は，若干言葉を変えたところがあるが本書に紹介されている事柄である。これらは昔の話とも思えない。

専制権力が，村の末端まで警察支配網を張り巡らし，人民の自由を束縛し，過酷な処罰を行っていたのが，中国専制主義の支配の実態であった。こうした国家権力の下では，毛沢東時代の国家が主張していたように，あらゆる人民の専制国家に対する反抗はみな正義の人民「起義」であった。同じ中共政権下でも現今は，蜂起すると「国家転覆罪」，あるいは「暴乱」と見なされるにいたったのであるが。さて，清朝という専制国家が辛亥革命で打倒され，人民は結社や組織や集団を作って，窒息していた「民衆の社会」を伝統的な方法で一気に濃厚に作り始めた。清朝時代に始まっていた「帮会」や「会・道・門・堂・教……」が，辛亥革命以後に雨後の筍のように全国いたるところに叢生し始めるのもまた当然のことであった。つまり，中国民衆が明清時代に抑圧され，窒息していた自分たちの「社会」を，「自分たちの固有の伝統方式・伝統文化」によって急速に作り出していったのである。

王朝時代には，民衆が作る社会的結合は「宗族制社会，商人・職人が作る行会，それに秘密結社・土匪社会」の3本であった。本書も「秘密会党に代表される異姓結拝組織は宗族，ギルドと合わせて中国社会の三大組織を構成している」(82頁）という陳旭麓「秘密会党与中国社会」の主張を引用している。しかし，この宗族社会は血縁を原理・紐帯とする原始的なベクトルに支配されている。また商人・手工業者のギルドや同郷会的な組織は，専制王朝の権力から自立した存在ではなかった。そして秘密結社・土匪社会は「裏社会に存在する」もの，したがって「反社会的社会」と規定する以外にはない存在であった。つまり中国には歴史上，ヨーロッパ近世・近代に公然と登場して，国家に対抗する威力と空間を持ったような社会的組織・団体・結社が充分に成長できなかったのである。

社会とは，西洋古代中世に姿を現し，中世のゲルマン共同体，教会修道院共同体，自由都市共同体，大学共同体等々の諸共同体を基礎にして生まれ，それが近世近代になってからさらに発展し，公然と国王や領主に対抗し，自治・自由・諸権利を獲得していったものである。つまり「都市・市民階級・ギルド・大学・教会・修道院，弁護士等法律家，学者・知識人・芸術家の集団」等々によって生み出されたものである。彼らが長い苦闘の戦いによって，国家権力から一程程度の自由と権利を獲得し，一程程度の自立した世界を形成した時，それを「社会」というのであり，また「社会」とは，こうした過程を経て生み出された歴史的概念であり，歴史的範疇なのである。

もちろん中国にも古来，「社会」はあった。しかしそれは，二千年にわたって専制権力の支配のもとに「屈服・屈従」してきた存在であった。今

でも民衆は国家政府要人を公然と批判し，公然と街頭で抗議の行動を起こすことさえできない。明清時代から現代の国家にいたるまで，西洋的な意味での「社会」は，未だきわめて未成熟であり，したがって「社会」が政治権力に対抗して「自己固有の砦，守備範囲，空間，権利の世界」を確立しているということはできない。国家権力が人民を直接に統制し，管理し，支配し，収奪している，つまり専制主義の支配している「社会」なのである。こうした「社会」では，人民は「洪門・青紅幇・哥老会」や法輪功のような「会道門」的結社，俗に「秘密結社」と呼ばれる，いびつな，隠れたる，善悪を同時に行う「秘密結社的なるもの」を発展させ，それを頼ることになるのである。

私が提起した「国家／社会」二項対立の中国社会史論の意味は，簡単にいえば上記のようものなのである。評者である小林は「歴史的実在から一歩離れて，新たに理念としての秘密結社を作り出した」のではなく，「中国の歴史的実在に即して，新たに秘密結社の「秘密性」を解いたのであり，中国の国家社会の「秘密性」の由縁を明らかにした」と修正されるべきであろう。最後に，本書（12頁）の中で，中国革命史の暗部を研究した私の論考を，「アンチ革命」の角度からの研究とされたのにはいささか不満を覚えた。私はこれまで中共の「壮挙」であった「中国革命」に反対したことはない。フランス革命からロシア革命を経て中国革命にいたる，近現代の革命史の暗部をも見据えた世界革命史の再評価を目指さんとしているだけである。念のため。

孫江氏のこの力作は，これまでの秘密結社に関する固定観念を一気に打破し，各時代・各地域・各結社を柔軟な目で鋭く観察し，中国の国家と民衆の複雑に絡まり，捩れあった関係史を，「秘密結社」を中心にして繊細な感覚で浮き彫りにした。最近は買っても書評はおろか通読する気にさえならない本が氾濫している中で，本書は読んでいて全く退屈さを感じさせなかった。しばしば知的な興奮さえ覚えた。多くの人が読み，改めて中国の国家と社会の全体的構造・構成を考える際に，座右の書となるべき実に優れた専門書であると信じる。今後，孫氏には研究を中国近代史や秘密結社史に限定せず，その語学力を駆使して日本と中国の国家・社会・文化の比較史的研究を通じて，東アジア世界史へ，さらに世界史の再構成へと壮大な歴史研究の旅を続けられんことを期待する。

さて，最後に一言。中国人の孫江氏が日本において祖国を愛情のこもった，しかも冷徹なる眼で眺め，祖国の歴史と社会を新しい感覚と方法論で捉え返し，外国語である日本語で，このような重量感溢れる立派な学術専門書を出版されたことに深い敬意を表するものである。本書を捧げられた御母堂も冥界でさぞ喜ばれておられるものと信ずる。

（2007年３月，619ページ，税込15,750円）